女が別れを告げるとき

落合恵子

無縁佛
作品社

池田みち子（いけだ・みちこ）
一九一四年、京都に生まれる。十七歳で家出上京し、「赤色救援会」の事務所を二年近く手伝う。そのために屢々逮捕される。その後、日本大学芸術科に入学、「翰林」「星座」の同人となる。大学卒業の頃より「三田文学」に執筆するようになり、上海に滞在し、上海ものを書く。戦後、『醜娼伝』『災禍の芽』『姦通夫人』『黒い手』『山谷の女たち』『無籍者』『生涯の娼婦』等々の著書がある。一九五九年に発表した『現代の陥穽』は、冤罪が無実の罪で殺人犯にしたてられてゆく経緯を追求したもので評価が高い。

無縁佛

一九七九年一二月二五日第一刷印刷
一九七九年一二月二〇日第一刷発行
定価一二〇〇円

著者　池田みち子
発行者　寺田博
発行所　株式会社　作品社
東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒一〇二　電話（〇三）二六二ー九七五三
振替口座（東京）六ー二七一八三

本文印刷　図書印刷
カバー・扉　栗田印刷
製本所　小泉製本

（落丁・乱丁本はお取替え致します）

© Michiko Ikeda 1979　Printed in Japan

目次

無縁佛 5
源爺さん 43
よどみ 73
おのぶさん 113
追込み部屋 143
逃亡 187

画　滝川　武

装丁　菊地信義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

無縁佛

無
縁
佛

救急車のサイレンが窓の外を通りすぎた。このところ毎晩のようだ。また行き倒れだろうか？喧嘩の怪我人だろうか？　が、ドヤの中は廊下を通る足音がきこえるだけで静かだった。

私は蒲団の中で腹這いになって灰皿をひきよせた。隣りのベッドとの境は二十センチの高さに棒が一本渡してあるだけで、一昨日引越してきた婆さんが寝ていた。それで婆さんの胡麻塩頭が私の鼻の先にあった。私がマッチをすると婆さんが蒲団から顔を出して自分の灰皿をひきよせた。この婆さんのような皺の多い顔を私は見たことがない。額や眼尻の皺は当然だが、眼尻から唇の端の方角に何本も皺が流れている。上唇には無数の縦皺が、顎には横皺が並んでいる。いちばん奇妙なのが鼻の上の皺だった。眼と眼の間の皺はいいが、鼻のまん中に横皺が二本ある。しかもすべての皺のくぼみが黒い紐に見えるほど深い。それで、無数の縦皺、横皺、斜め皺を顔の形に寄せ集めたようである。皺婆さんに私は好感を持ってはいなかった。一昨日の晩、片手に大きな風呂敷包み、もう片方に買物籠と雨傘を持って、一つだけ空いていた隣りのベッドに引越して来

たのだが、私をじろっと見て「ふん、新顔かア」と馬鹿にしたような云い方をした。私はドヤの人たちとかかわりを持たないよう、喧嘩にまきこまれないよう心掛けていたのでだまっていたが、私はもう半年も泊っていて、この女部屋では旧い方から三番目になっていた。それで、新顔はお前じゃないか、可笑しな婆アだ、と思った。その晩おそく帰ってきた女が「なんだ、また舞戻ったのか」と婆さんへ声をかけた。それで婆さんは出たり入ったりしている常連だとわかった。

婆さんは灰皿をかきまわして、やっと長いのを探して「マッチないか」と私へ云った。婆さんが口へくわえたのはひと息吸えば終りになる短い煙草だった。私は見かねて、マッチと一緒に煙草三本とって、境の棒越しに婆さんの枕元へだまっておいた。すると婆さんは向いのベッドの三輪の方をちらっと見た。このとき部屋にいたのは三人ぎりであった。三輪は私たちの方を向いて御飯を食べていた。御飯を炊いた鍋と、経木へ入ったままのつくだ煮が膝のところにあって、それだけで食べていた、漬物もなにもない。三輪がぼんやり前を向いているのを確かめると、婆さんは私を見て、にっと愛想笑いをした。そして三輪にきこえない小声で「ありがとよ」と云って吸いつけて、こんどは普通の声で「景気がいいね、まだ若いもんな」と云った。若いと云える齢では私はない。皺婆さんに比べれば若いというだけである。先に煙草を吸い終った私は頭から蒲団をかむった。

消燈になってからまもなく、奇妙な音がきこえてきた。砂時計が時をきざむような同じ間隔で、ぽとん、ぽとん、という。昨夜もきこえたし、その前の晩もきこえた。もっと前のことはわから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ない、聞きのがしてしまいそうな小さな音だから。小さな音でも、正体のわからない音は耳につくと眠れない。確かに部屋の中である。婆さんが泊った晩からきこえ始めたようだし、方角も婆さんのベッドだ。水の落ちる音とは違うし、何かをたたく音とも違う。指の関節を折曲げるぽきっという音でもない。音は二十分ぐらいつづいてからぷっつり消えた。

山谷の簡易宿泊所、つまりベッドハウスとくやには、六畳の部屋が十二あった。二階へあがったすぐの部屋が女部屋で、ほかは男で、男の殆どが土方だった。東京オリンピックを三年後に控えて、競技場の基礎工事が始っていたので土方たちは景気がよかった。

六畳の真中に、入口から奥へ三尺の板敷があって、板敷の両側に二段ベッドがあった。左側の下段が私と婆さん、右側が三輪と雪である。上段にベッドがあるから全部で八人だが、八人が顔を揃えたことは一度もない。朝早く出勤して夕暮帰ってくる、町工場や建設現場で働いている女、昼すぎか夕暮出て行って夜おそく帰ってくる水商売の女、夜出て行って翌朝帰ってくる娼婦、職業の種類によって帰る時間がてんでんばらばらだからである。

その翌朝、私が眼を覚したとき、皺婆さんと三輪はもういなかった。その代り上段のベッドは四つとも人が寝ていた。板敷を距てた向いのベッドの雪だけが昨日からつづけて留守である。私が此処に引越してきて最初に泊ったのはいま雪がいるベッドだった。坐ると頭が天井に、つまり

上段のベッドにつかえるので、私は背中をまるめて坐らなければならなかった。それで、上段のベッドが空くのを待って移った。この部屋には天井板がないので、上段のベッドでは立上っても屋根裏まで余裕がある。それはいいが、垂直の梯子を昇り降りするのがどういうことか、それまで私にはわからなかった。ベッドが眠るためだけのものなら垂直の梯子でもいい、が、ドヤのベッドは日常生活の全部を営む場所であった。煙草を買いに行ったり、お茶が飲みたくなったり、トイレへ立ったり、私は絶え間なしに梯子を降りたり昇ったりしていなければならなかった。それでいまのベッドが空いたとき移ったのだった。

私はお腹がすいたので起きた。ベッドの入口に針金が張ってあって、タオルや洗濯物をかけるし、ハンガー代りに着るものもかけた。私は針金からスカートをおろしてはいて、枕元にまるめておいたセーターを着た。夜明けとともに土方たちでざわめいた廊下の突き当りの洗面所は今は人影もなく、ドヤ全体が森閑としている。

私はレインコート兼用のコートを着て、新聞紙に包んで足元においてあった靴を持って玄関へ降りた。

山谷の食堂は夜明けと共に店を開けるが土方たちの朝食の時間が終ると閉めてしまう。それで、開けていればいいなア、と思いながら、山谷通りへ出る角で、隣りの婆さんと鉢合わせになった。「あら、仕事休んだの？」と思わず声をかけた。婆さんは引越してきてから毎朝、と云っても今朝で三日目だが、土方たちと一緒に出て行くので、建設現場で雑役でもしているのかと思ってい

た。街で見ると婆さんの皺はたいしたことはない、ドヤでは屋根裏から電球がひとつぶらさがっているだけなので、顔の片側から光を受ける。それで凹んだところが黒く目立ったのだ。その代りというのも可笑しいが、婆さんは奇形に近いほど背が低い。こんなに小さいとは気がつかなかった。「雑巾ばけつ、ひっくりかえしてやった、馬鹿にしやがるからよオ」余程腹を立てているらしく、唇をふるわせている。洗いはげた絣のもんぺにジャンパアを着ているが、ジャンパアの袖口は肘のところまで折り曲げてあって、裾は婆さんの膝までである。こんな格好では何処でも乞食扱いされるだろうと思い、可哀想で「誰が馬鹿にしたの？」となぐさめるように聞いた。「昨日若い娘が入ってきた、年寄りの私に掃除さして、娘は知らん顔で机にむいてごそごそやっている、社長の前で、手伝え、って云ってやった、そしたら社長が、掃除はおばさんがしろ、って云やあがった、助平爺イ奴！　癪にさわるから雑巾ばけつの汚い水をぶっかけてやった」「社長にぶっかけたの？」「娘にだよ、白いセーター着ていたからセーターにぶっかけた」そこで言葉を切って「洗濯しても落ちないぞオ」と、肩をすくめて、面白そうに笑った。が、笑いはすぐに消えて泣きそうな顔になった。クビになったのだろう。「御飯食べに行くから一緒においでよ、美味いもの食べて気を晴らしなさいよ、私がおごるよ」こんな高齢者が働いて食べるというだけでも大変なことだと思った。

山谷通りの食堂はもうみんな閉っていた。「まだやっているとこ知ってるよ」と云うと婆さんは従いてきた。歩きながら「女のひとに御馳走になって悪いね、渡る世間に鬼はない、って、奥

さんのことだね」と私は突然奥さんに格上げされた。婆さんは私を仰ぎ見ながら「齢とるとみじめなもんさ、奥さんにはまだわからんだろうが、誰も相手にしてくれんよ、若いとき、もっと考えて暮せばよかったよ、せめて、二十七、八なら、ねえ」「そうね」と私は云った。

旧吉原の方角へ山谷を出はずれたところに、行きつけの小さな外食食堂がある。時間が半端なので、客は私たちだけで、この朝の定食は、味噌汁、漬物、納豆であった。壁に短冊型の紙が並べて貼ってあって、定食以外に出来るものが書いてあった。私は短冊を眺めながら「何でも食べたいもの食べて」と云った。「悪いね、酢蛸食いたいよ」「酢蛸？　酢蛸はないねえ」文字通りの外食食堂である。山谷の食堂は朝から酒を呑む客がいるので、酢蛸も刺身もある。私は鯵の干物を貰って、婆さんへ「そこに書いてあるの、何でも貰って」と短冊の方を眼で差した。すると突然大声で「いらないよォ」とどなった。私はびっくりして婆さんの顔を見た。酢蛸がないからと云って怒ることはない。病的に短気で怒りっぽいのだろうか？　この性格のために世間をせまくしてきたに違いない。それでもお膳が運ばれてくると婆さんは機嫌よく食べ始めた。朝飯をろくに食べなかったらしい。

このとき入口の硝子戸が開いて女が入ってきた。私は女を見てちょっと頭をさげた。三輪の真上のベッドにいる女で、私がとくやを出たときはまだ寝ていた。茨城さんと呼ばれているが、茨城というのが苗字なのか、茨城県出身という意味かはわからない。出身地を名前にして呼ぶことは珍しくはない。苗字だとすると茨城ではなく茨木かも知れないが、それだって本名か偽名かは

わからない。四十すぎの細面の、色は黒いが眼鼻立ちの整った女で、茶色のオーバーを着て黒い靴をはいて、ハンドバッグを持っている。八人のなかで、曲りなりにもオーバーを持っているのは茨城と私だけであった。靴をもっているのも二人だけだ。茨城は「まア仲のいいこと」と私のそばに立って二人を見おろしながら云った。その云い方にけんがある。「私も定食」と奥へむいて云って「デコちゃん、仕事休んだのか」と婆さんへ云った。デコ！　あだ名だろうが面白い名だと思った。「馬鹿にしやがるから、やめたよ」さっきはあんなに腹をたてて私に話したのに、こんどはどういうわけかもそもそと話した。「またやったのか、デコちゃん」とひやかすような云い方をして「デコはかっとなると何も彼も忘れるから困る、勘定ちゃんと貰ってきたかね、また金杉さんに頼んで取りに行って貰うのか、金杉さん人が好いもンなア、頼まれるとよう断れない男だよ」それから「宗教信じているからなア、宗教も考えもんだよ、人に利用されてばかりいる」と云い、私へむいて「此処へかけていいですか」とわざとのように聞いて私の横にかけた。私のお膳にだけ鰺の干物があるのがひどく豪勢に見えた。

食べてしまうと私は煙草を吸いつけて、残りを婆さんの方へ差出した。婆さんは手を出さない。茨城が「貰ったらいいじゃないか、折角すすめてくれているのに」と云うと、やっと一本ぬきとった。煙草一本ぐらいのことで婆さんはどうしてこんなに人眼を怖れるのだろう、昨夜も三輪の方をちらっと確かめた。私が二人分支払うのを茨城に見られるのは具合が悪いのではないかと気を使ったが、払わなければ婆さんは文無しかも知れない。私は席を立って調理場の方へ行って二

人分払った。

この時期の私は、仕事への自信を失い、文学への野望もくじけて、熟れ腐った果実が自然に落ちるのを待っているような、投げやりな日々を過していた。私は地方新聞に毎週木曜日、十二枚のコント風の小説を連載していた。「女の風景」という題名で、毎回違う職業、年齢の女が登場する読切連載で、できるだけエロチックなものを、ときびしく云い渡されていた。私は気乗りせず書きたくなかったが、この仕事だけが唯一の収入なので書かないわけにはいかなかった。気乗りのしない小説は読者の評判もかんばしくないらしく、いつ中止されるかわからなかった。私は十二枚の原稿を仕上げる二、三日の間、自分の家ですごした。書きあげるとすぐとくやへ舞戻った。

家族は私をちゃんとした作家だと思いこんでいた。書きたくもない作品を無理に書くやりきれない気持など知るよしもなかった。親は、子供が成績の悪い答案をかくしていることに気づかず、妻は、良人の事業が破産寸前なのを知らない。家族というものはこういうものかも知れない。それにしても、勝手に理解したつもりでいられるための負担に耐えて行くのは並大抵ではない。

家にいる間、私は仕事机の前を離れた途端に機嫌のいい顔を拵えた。そして、興味のない話題でも調子をあわせて話相手をした。家族の一員であるために誰でもが無意識にしているだろう家族への心遣いが、私にはわずらわしかった。仕事への自信を失うに従ってそのわずらわしさに耐

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com